

第3章 学校における取組み事例

1. 小学校の事例

ゆびもじはみみのきこえないひとにとってたいせつなんだね ～聴覚障がい理解～

学年等

1年生 特別活動など

ねらい

- ◇ 日常の基本的な手話を学んだり、手話といっしょに気持ちをこめて歌ったりするなどして、手話に親しむ。
- ◇ 聴覚障がいのある子どもの保護者の思いを聞くなどして、学年に在籍する聴覚障がいの仲間を理解する。
- ◇ 地域のボランティア活動をしている方と出会い、「福祉のこころ」を育てる。

【指導について】

学年には2人の難聴の児童が在籍しており、2人とも補聴器をつけているので、周りの児童も聞こえにくいということは理解している。コミュニケーションの手段は主に読話（相手の唇の動きを読み取る）と発声を組み入れた口話で、児童も教職員たちもゆっくりとした言葉で対話をしていた。また、この2人の児童は少しだが手話も使うことができる。そこで、聴覚障がい者にとって、話し言葉以外に手話や指文字で話すことも有効なコミュニケーション手段であることを伝えるため、本校の卒業生で聴覚障がいのある子どもをもつ保護者であり、地域で手話の指導をされている方に指導を依頼した。手話の指導とともに、聴覚障がいのある子どもの保護者の思いを直接聞くことにより、2人の聴覚障がいの児童への理解につながると考えた。

手話を身近なものとして感じることができるよう、口で歌うだけでなく、歌詞をよりどころにして、手や体で歌うことにより、歌詞のイメージをより広く、より深く伝えることができる。そして、心をこめて手話で表現することにより、人と人との温かい交流を育てることができる。指導においては、手話の習得を目的とするのではなく、メロディやリズムにのって、手や指あそびの感覚で楽しみながらやりたい。

また、この取組みの実施にあたっては、まずは教職員の聴覚障がいへの理解が重要であると考え、全教職員対象の校内研修において、指導していただく方に聴覚障がい者の取り巻く状況や家族の思いなどをお聞きした。

取組みの流れ

<全4時間>

第一次 聴覚障がいのある子どもの保護者による手話講座・・・・・・3時間

① あいさつや月日など ② 気持ちの表し方など ③ 歌など

第二次 福祉委員会の方による手話コーラス・・・・・・1時間

取組み例

第一次

3時間 聴覚障がいのある子どもの保護者による手話講座

① 日常生活の基本的な言葉

▽ あいさつ ▽ 1月～12月 ▽ 曜日

▽ 動物の名前 ▽ 好き、嫌い など

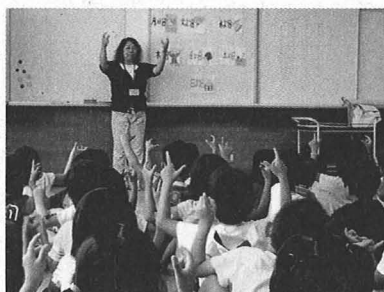
② 気持ちの表し方

▽ うれしい、悲しい、
こわい、楽しい など

③ 日常的な基本的な言葉と歌

▽ 仕事の表し方 ▽ 歌（さんぽ） など

- ・曲想を感じ取って、明るい声で歌おう！
- ・歌詞の内容を生かして、手話といっしょに気持ちを込めて歌い、手話に親しもう！



第二次

1 時間

福祉委員会の方による手話コーラス

<曲名>

▽ つばさをください ▽ さんぽ ▽ あーおいし
▽ 海 ▽ ふじさん ▽ きらきらぼし など



<児童の感想>

「しゅわをおしえてもらって」

- たもくてきしつでおばちゃんたちにしゅわでうたをおしえてもらったよ。きらきらぼしはかんたんだったけど、ふじさんはむずかしかったよ。きょうせんせいにゆびもじをおしえてもらいました。じぶんのなまえができてたのしかったよ。
- きらきらぼしやかたつむりはかんたんでした。ゆびもじは、みみがきこえないひとにとってはだいじとおもいます。きょうはじめてゆびもじをしました。でも、はじめむずかしかったけど、だんだんなれてきました。とくに、てもじがたのしかったよ。ゆびもじはみみのきこえないひとにはたいせつなんだねっておもったよ。

- ◎ 手話の取組み実施にあたって、校内研修にて聴覚障がいの子どもをもつ保護者(手話を指導していた方)の思いをお聞きし、児童への指導に生かした。

聴覚障がいのある子どもをもつ保護者の思い (校内研修より)

2歳の誕生日、近くの病院での検査の結果、お医者さんから「聞こえていません」と伝えられました。その時は何の感情もわからず、ただ「どうしたらいいのか…」と思うだけで帰宅しました。言葉の遅れは少し気になっていましたが、まさか自分の子どもの耳に障がいがあるなんて夢にも思っていませんでした。

細かい検査の結果、「感音性高度難聴」という診断でした。電車に乗っていても、電車の走る（ガタンゴトン）音が聞こえないという説明を受けました。そして、週2日A聾学校（現A聴覚支援学校）に通学を始めますが、毎回自然と涙があふれました。「補聴器をつけてもすぐには話せません。今から聞きだめ（言葉の基礎づくり）をして、一年後には必ずうれしいことがありますよ。それまで、いっぱい経験や体験、ことばの海を与えてあげてください。」という先生の言葉に励まされました。

また、「学校ではお母さんは泣かないで（先生がお母さんをいじめているととらえてしまって学校がいやな場所になってしまうから）」、「必ず連れて来て（後は任せてください）」、「兄弟姉妹関係をしっかり作ってください（将来大切な関係になるから）」という先生の言葉も心に残っています。

A聾学校の幼稚部に進み、話す、身振り・手振り、手話、キュードスピーチ（発音発語、読語の補助手段として、口形と手の動きで日本語の音を表す話し方）などいろいろな手段を使い、言葉の力を培っていきました。とにかくコミュニケーションを取り、言葉かけを増やしていきました。

これは、私が一週間に一回書いた日記です。

絵日記も成長に合わせてキュード文字（口形と色で五十音を表す文字）から簡単な文章へ変わっています。

5歳になると、地域の幼稚園にも週一回通園を始めました。

そして小学校入学。就学先はA聾学校の小学部か地域の小学校なのか悩みました。聾学校では元気なのですが、地域の幼稚園ではしょんぼりとした姿が多かったからです。

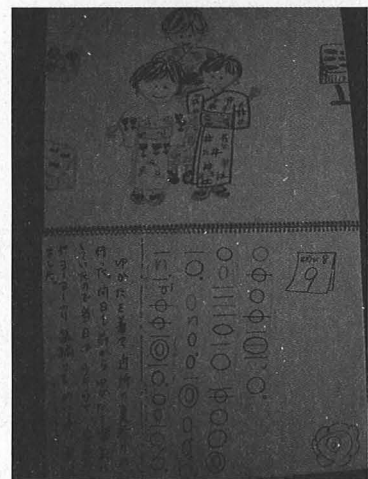
でも、「地域の人たちに娘の存在を知ってほしい」「近所に友だちをつくってほしい」という思いが強く、地域の小学校への就学を選びました。また、地域の幼稚園に行っている時に当時の校長先生から、「地域に帰っておいで」と声をかけてもらったり、小学校の先生が聾学校まで娘を見に来ていただいたり、『学校が受け入れてくれている』と思えたのも大きかったです。

地域の小学校に行くことになり、娘は近所に友だちがいっぱいでき、バスケットという夢中になれるものもできました。

私は自分が小さい頃からこの地域に生まれ、育ってきました。娘に聴覚の障がいがあるとわかってからこの地域から出ようかと考えたこともありました。

しかし、夫が「だからこそ、この地域で!」と言ってくれたのです。どこへでも連れて行っているなど娘のことを話していました。娘が難聴であるということもです。娘には「こうやって人と接するんだ」というのを身をもって示してきました。その姿を見て、私も地域に出て行こう、みんなとつながっていこうと思えるようになりました。

今、私は地域の幼稚園や学校で手話を教えています。幼稚園では「手話のおばちゃん」と呼ばれています。友だちとなじめない子も手話を使うと仲間に入れたりしゃべれたりしています。手話を話せる子が増えたらいいなあと思っています。でも、手話ができないとだめかというと、そうではなく、もっと大事なことがあります。例えば、話をしている時に「わかる?」と合図をしてくれたり、娘の方を見ながら話をしたりするだけで、娘は「自分のことを気にかけてくれている」



「仲間に入っている」と思うそうです。自分の居場所があるという安心感を感じることができるみたいです。そのことをみなさんにも知ってもらい、耳の聞こえにくい人に出会ったら、その人の方を向いて話をしてほしいなと思っています。

取組みを終えて

講師は、あいさつや気持ちの表し方など1年生にも十分理解できる内容を準備してくださり、児童らは講師の手話を必死でまね、覚えようと懸命であった。手話が自分にもできるという喜びと感動を3日間の手話講座で味わうことができたことは、大変貴重な体験であったと思う。

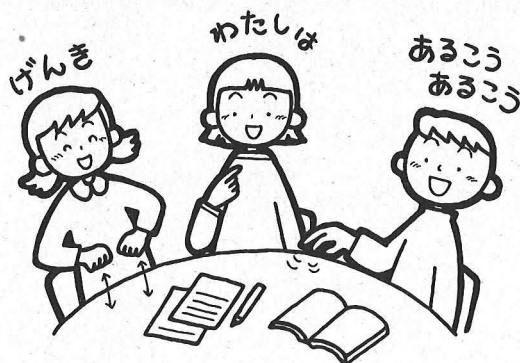
授業後、もっと手話を覚えたいという声も多く聞かれた。また、2人の難聴の児童とも習いたての手話を入れながら対話している光景も見られ、ほのぼのとした気持ちにさせられた。

また、講師は、聴覚に障がいのある子どもをもつ保護者でもあるので、手話の指導とともに、障がいのある児童の気持ちやその保護者の思いについても1年生にもわかりやすいように話していただき、学年に在籍する2人の難聴の児童への理解につながっていった。

今後は、低、中、高学年の発達段階にあわせて、聴覚障がいのある人の状況は個々様々であり、コミュニケーション手段としても手話だけでなく、筆談や読話など、聞こえを補う方法が様々あることを学ばせたい。このような指導の積み重ねを基に、児童たちに豊かな表現力と温かい心を培い、障がいのある人との心の交流を積極的に進めていきたいと考えている。

【 ポ イ ン ト 】

- ☆ 学校の中で、難聴児童が他の児童とともに学び、ともに生活することが、障がいがある児童のみならず、周りの子どもたちにとっての福祉教育にもつながる可能性を示した実践であり、特に次の3点がポイントとしてあげられる。
 - ① 担当教員だけでなく全教員が校内研修にて事前学習を行い、学校全体の取組みとして位置づけている。
 - ② 教員と卒業生の保護者との協働参画の実践であり、卒業生の保護者は学校の特別支援教育を支援するボランティアであり、教育基本法の第13条に示されている「学校、家庭及び地域住民などの相互の連携協力」にあたる。
 - ③ 手話習得を目的とするのではなく、「手話」をコミュニケーションの方法ととらえ、楽しみながら手話を使って「聴覚障がい児の生活理解」を深め、人間関係の拡大も図っている。(本資料集11頁参照)



いっしょにいるとあんしん

～高齢者との交流～

学年等

2年生 生活 「わたしとかぞく」

～おじいちゃん おばあちゃんと いっしょ～

ねらい

- ◇ 一人暮らしの高齢者を訪問し、昔の遊びを教わったり、昔話を聞かせてもらったりしながら昔から伝わっている知恵を知り、高齢者のやさしさやあたたかさにあふれる。
- ◇ 児童たちの合奏や、紙芝居を聞いてもらったり、手作りのおもちゃでいっしょに遊んだりして楽しい時間を過ごす。
- ◇ 高齢者と交流して知恵を学ぶことで、「福祉のこころ」を育てる。

【指導について】

民生委員さんたちは、80才以上の一人暮らしの高齢者のために、家に行き「元気にしてる？変わりない。」と、声をかけたり、月2回食事を届けたり、イキイキサロンを開き、楽しい時間をつくったりしておられる。また、「キッズ・Eyeぼらんていあ」といって、小学生が週1回、民生委員さんと一緒に一人暮らしの高齢者の家に行って学校であったことを話したり、歌を歌ったりしている。

これらの活動には、お年寄りの「孤独死」を出さないという強い思いがあり、クラスの中にこの「キッズ・Eyeぼらんていあ」に入って活動しているAさんがいるので、活動の話をしてもらった。すると「私も行きたい。ぼくも」という声が出たので、民生委員さんと相談し今回の活動につながった。

児童たちの生活を見ると、祖父母と同居している児童は少ないが、近くで暮らしていてよく行ったり来たりしている児童が3分の1以上いた。しかし、どこかに連れて行ってもらうことがあっても、「一緒に遊ぶ」ということはあまりないようだ。まして、曾祖父母ぐらいのお年寄りと一緒に過ごすことは、ほとんどない。また、学校では外遊びなど休み時間を待ちかねているが、家に帰るとゲームが中心で、遊びの幅が狭いように感じられる。そのような児童たちに、昔から伝わっている遊びは、遊びの幅を広げ、より豊かな生活を過ごすための貴重な体験となるであろう。

この活動をきっかけに、身近にいる多様な年齢の高齢者に直接ふれ合い、お互いの顔や名前を覚え、地域の人々とより交流を深めることを大切にしたい。そして、みんなでその遊びを楽しむ中で、身近な人々との接し方や、相手との関わりを大切にする心情や態度を養い、「福祉のこころ」の醸成につなげたい。

取組みの流れ

<全5時間>

第一次 準備をしよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・3時間

・グループ分け ・役割決め、出し物の相談 ・おみやげ作り、出し物練習

第二次 高齢者宅訪問、手紙を書こう・・・・・・・・・・2時間

・高齢者宅訪問 ・手紙を書こう

展開例

第一次 3時間 準備をしよう

① グループ分け

- ▽ 活動しやすいように、1グループを4～5人で編成する。
- ▽ 自分の住んでいる地区に入るようにする。
 - ・自分の地区の高齢者と親しくなり、挨拶や言葉かけがしやすくなる。
 - ・おじいさん、おばあさんが、誰の子どもか、誰の孫かを知ることができる。

② 役割を決める。出し物を考える。

- ▽ グループ活動により、リーダーとしての責任や協調性、思いやりを育てる。
- ▽ みんなで協力しながら計画を立てる。
- ▽ 視覚、聴覚など、体に障がいのある方がおられるので、それぞれの状況の方が楽しめるように工夫した出し物を考える。

- ・例えば、紙芝居や「きらきら星」を鍵盤ハーモニカとカスタネットで合奏する。
- ・座っていてもできるこま回しをする。

聞こえるように大きな声で読むね。



「ひまわり」(支援学級)さんで作ったこまをしよう。

③ おみやげを作る。練習する。

- ▽ おじいさん、おばあさんが、あまり動かなくても楽しめるものを考える。
- ▽ あいさつや司会など、自分たちで会を進められるようにする。

第二次 2時間 高齢者宅訪問、手紙を書こう

④ 高齢者宅訪問、手紙を書こう。

- ▽ 高齢者宅を訪問し、昔話を聞いたり、遊びを教えてもらったりする。
- ▽ 児童が紙芝居や合奏をしたりして、楽しい時間を過ごす。
- ▽ 親しみと礼儀をもって、話し方や接し方を考える。

- ・一方的なものでなく、双方向の交流になるようにする。
- ・負の面のみの理解にならないよう、楽しい交流にする。

学 習 活 動	活 動 の ポ イ ン ト など
1 民生委員さんが学校に迎えにくる。輪になって待つ。 ・あいさつをする。「おはようございます。」 「お願いします。」	・民生委員さんにお世話になることを理解させておく。
2 自分の住んでいる地区に行く。 (4～5人で8地区に分かれる)	・車に気をつける。ふざけて迷惑をかけないようにする。
3 一人暮らしの高齢者宅を訪問 ・リーダーあいさつ 「こんにちは。僕たちは、〇小学校の2年生です。」 ・鍵盤ハーモニカとカスタネットで合奏する。 「きらきら星の合奏をします。聞いてください。」 ・紙芝居をする。	・自己紹介をする。誰が来たのかをしっかりと知ってもらう。 ・出し物は、視覚や聴覚に障がいのある方がいらっしゃるので、ゆっくり大きな声(音)で伝える。 ・昔話のように親しみのあるものをする。

- ・手のりごまで、お年寄りと遊ぶ。
- 「ぼくたちが、見本を見せます。見てください。」
- 「これは、おみやげに置いていきます。遊んでください。」

- ・おしゃべりタイム



〇〇とこの
孫か？

学校では今、何を
習ってんや。

このこまよう回る。
あんた上手やなあ。

4 帰校

- ・お礼の手紙を書く。

- ・こまは、支援学級の仲間に教えてもらった物を、人数分作って一緒に遊ぶ。
- ・こまは、おみやげに置いてくる。

- ・昔の学校の話や遊びを教えてもらう。

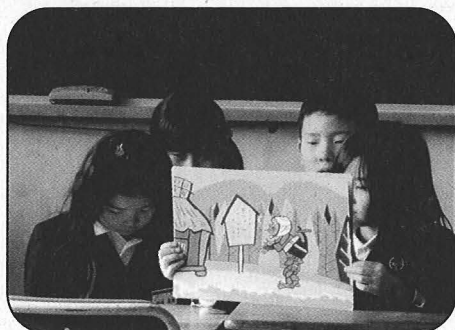
あんたのおじいち
ゃんと同級生や！

83 才や。
ここらはきれい
な海やってんで。



また来てや。楽しか
ったわ。ありがとう。

- ・後日、民生委員さんに届ける。



大きな声で、
はきはきと発表しました。



おもしろい！
ようまわるわ！
うまい！うまい！
パチッ パチッ（拍手）



<児童の感想>

「おばあさん・おじいさんと出会って」

- きょうは、おばあちゃんたちとこままわしをしました。BさんとCさんがものまねをしたよ。じこしょうかいをしました。昔の学校のことも教えてくれました。とても楽しかったです。
- きょう、近くのおばあちゃんの家に行きました。おばあちゃんは目があまり見えないことを知ったので、紙しばいもピアノカもしっかり目の前ではっきりとあげました。
- Dさんのおばあちゃんのところに行きました。紙しばいをしんけんに聞いてくれました。ピアノカをしました。えがおで、聞いてくれました。こまをまわしてあそびます。お元気でながいきてください。

○ Eさんのおばあちゃんのところに行きました。かさこじぞうの話をしんけんに聞いてくれました。合そうをしました。えがおで聞いてくれました。しりとりをしました。おもしろかった。家の中をたんけんしました。めいろみたいでした。おもしろかったと言ってくれました。うれしかった。「わらったのは、ひさしぶりや。」と、言っていました。楽しかった。

取組みを終えて

この取組みは、学年に在籍している児童Aさんの話を基にして、民生委員さんの力を借りてできたものである。

地域に住む高齢者との出会いを通して、児童は自分と違う立場の人を理解し、他者への思いやりの心が育っていったようだ。活動の後、「Aさんのように『キッズ』（キッズ・Eyeぼらんていあ）に入りたい。」と言う児童が増えた。一人でも多くの児童が「キッズ」に入って活動を続けてほしいと思う。また、児童たちは、自分のおじいさん、おばあさんだけでなく、いろんな年代の高齢者に、これからも優しく声をかけたり、接したりしていけるようになっていくであろう。教員からみてこの町は、本当に「人にやさしい町」である。

この取組みをきっかけにして、今後の障がい理解のための教育やボランティア活動につなげていくつもりである。児童たちには、「この町は、本当に『人にやさしい町』だ。」と気づかせ、このような町を作っていくのは自分たちなのだと理解させ、行動できる人に育てていきたいと考えている。

【 ポ イ ン ト 】

☆ この取組みは、民生委員や地元の高齢者が子どもたちの福祉教育の支援者となって活動し、また子どもたちも地元の高齢者の孤立化の防止や生きがいづくりに貢献している。まさに、子どもたちと高齢者の双方にとって意義のある福祉教育である。また、子どもたちが「キッズ・Eyeぼらんていあ」を通して、自分たちのできることを考え、行動化することも視野に入れており、「生きる力」を実践の場で育むことも期待できる。

核家族化・少子化で、子どもたちは日常的に高齢者と関わる機会が少なくなっており、高齢者が日頃感じている思いや生活を理解しにくく、高齢者を尊敬し思いやりの心をもつことは難しくなっている。

一方、「孤独死」といった社会的孤立や孤独感を感じている高齢者が増加しており、高齢者福祉の視点からも、このような異世代交流は非常に有効な取組みである。

このように、子どもたちと高齢者の双方向の交流を通して、お互いの優しいまなざしや自分たちが愛されていることを実感できる取組みを行うことは重要である。このような実践は、この取組みのように学校と社会福祉協議会との協働参画型で行われると一層効果的であろう。